

EXPO'70 今振り返る1970年の 日本万国博覧会と当時の郵趣界

文・石田 徹

4月13日(日)～10月13日(月・祝)まで、大阪・^{ゆめしま}夢洲にて「2025年日本国際博覧会(大阪・関西万博)」が開催されます。これにちなみ、1970年に開催された「日本万国博覧会(大阪万博)」にスポットを当て、世界各国から発行された万博切手の発行情報などを石田 徹さんに紹介していただきます。(編)

▶図①：1970年3月14日に行われた万国博開会式の風景(日本万国博覧会30周年記念絵入りはがきより)。



日本万国博覧会開催30周年記念

開会式(EXPO'70)

■はじめに

日本万国博覧会(以下、万国博)は、大阪府吹田市千里丘陵で1970年3月15日(日)から9月13日(日)まで183日間開催されました。テーマは「人類の進歩と調和」で、海外参加76カ国、4国際機関、1政庁(香港)、6州と3都市、2企業。国内参加32団体でした。入場者数は6,421万8,770人、1日の最高入場者は83万6,000人でした。新技術を結集した未来都市を作り上げた万国博は、半世紀を超えた今も語り継がれています。ここで初めて登場した動く歩道や、電気自動車、携帯電話、ファミリーレストランなどは現代で普及している製品やサービスとなっています。

各国から記念切手が発行され、会場内には郵便局



図②：カナダ、本国の他に参加3州の洲花が描かれている。燐線印刷のバラエティがある。

も開設された事から、郵趣的にはサブジェクトの「発行目的別収集」や、消印を中心とした「マルコフィリー」などのコレクションを形成することができます。発行目的別のコレクション表現は図案別とは異なり、出展国、非参加国、開催国、その他といった万国博



図③：マルタの切手ホルダー、このようなホルダーを発売したパビリオンは多い。[35%]

表紙 [20%]



図④：モナコ館の記念スタンプ、カバーにも押印された。日付は万国博の会期。



図⑤：パチカン市国(左)の原図は尾形次雄、ローマ国立印刷局製。アブダビ(右)の原図は林 武で、印刷は共同印刷。



万国博への出展国

への関与度合でコレクションをする事も考えられますので、ここではほぼこの区分で解説します。

■万国博出展国の切手発行

出展国の1つカナダは前回の万国博開催国で、本国のほか、ケベック州、オンタリオ州、ブリテッシュ・コロンビア州の3州も参加しており、発行された切手図案にも各州の花が描かれています(図②)。

また、これら参加国では会場のパビリオン内で切手や切手をホルダーに収めたものを記念品として発売していることも多く、マルタ、モーリシャス、モナコや国連などでは積極的に販売されました(図③)。モナコ館で販売されたカバーが現在も初日カバーとして販売されているのを見ますが、押印されたスタンプは郵便印では無く、パビリオンの記念スタンプで、印色も青、赤、黒などがあります。モナコの万国博切手は3月16日の発行ですが、スタンプの日付は「15 MARS 13 SEPT」と万国博の会期を示しているのが特徴です(図④)。当時は切手ブームでもあり、会場内の土産物売場でも切手は人気商品でした。



図⑥：共同印刷製のコストリカ切手。

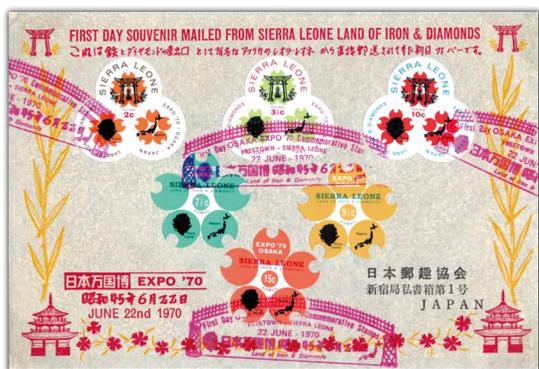


図⑦：大蔵省印刷局製の切手。ニュージーランド(上)には大蔵省印刷局の欧文銘版があるが、国連(下)には大蔵省印刷局の銘版無し。[各65%]

出展国からの切手発行は各国がほぼ主体的に図案制作をしており、1国当たりの発行点数も1種から数種と穏当な範囲に収まっています。原図ではパチカン市国やアブダビで日本人も関わっています(図⑤)。印刷ではフランス印刷局の他、クールボアジェ社、カナディアン・バンクノート社、ハリソン父子社、デ・ラ・ルー社など有名企業も見られます。また、アブダビ(図⑤)とコストリカ(図⑥)は日本の共同印刷製(銘版無し)であり、国連やニュージーランドのように大蔵省印刷局製もあります(図⑦)。

シエラレオネはシール式変形切手を発行し、当時、ワッペン切手、変わり種切手などと称されましたが、現在、各国からセルフ糊切手、変形切手が多種多様に発行されている事から見ると、先見性があったともいえます。シエラレオネのFDCには、日本語での日本郵趣協会宛のカバーも見られます(図⑧)。

出展国の中で最初に記念切手を発行したのは、チ



図⑧：シエラレオネの日本郵趣協会宛の初日カバー。[30%]



図⑨：出展国の中で最初に発行したチリ(上)と、閉幕1年後に発行したパナマ(右)。



▶図⑩：許可なしに個人が発行したクウェートの金色アルミ箔ラベル。[70%]



※ 2〜7割、特記外、切手75%縮小。また発行国の多くからは数種の切手が発行されているが、誌面では代表的な1枚を取り上げている。

万国博への非参加国



図⑪:「サウジアラビア館の上に太陽の塔」を描くシャルジャール(左)やアジマン(上)、ラサールカイマ(右)の切手。「日本館展示物のリニアモーターカーを前景に鉄鋼彫刻を配し、その中に古河パビリオンの遠望」など、実際には万博会場では見られない景観を描いたアジマン(右上)とシャルジャール(右)の切手。

70%

70%

りの1969年12月1日でした。対してパナマは何故か博覧会閉幕後1年近くも経って、1971年8月に切手を発行しています。デザインも自国パビリオン(国際共同館第2A地域)を採用する事無く、民間団体の電気通信館を描いています(図⑩)。

出展国の中で例外的なのはクウェートで、大阪の個人が当該国の許可を得ることなく作成した金色アルミ箔のラベルです(図⑫)。

万国博に出展しながらも、切手を発行していない国としてはアメリカ、フランス、西ドイツ、スイス、イギリスなど42カ国があります。また、中国は日



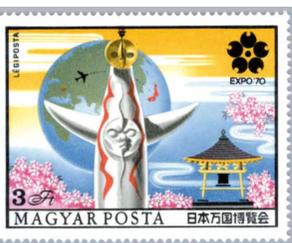
図⑫: ウムアルクワイン、天皇皇后両陛下の肖像を描き、話題に。

図⑬: オーマンと称して発行されたラベル。[70%]

中国交正常化前(国交樹立は1972年9月)であり不参加で、台湾(中華民国)が参加し、切手を発行しています。

万国博非参加国の切手発行

非参加国では、経済大国として発展した日本を相手として、外貨獲得目的で数次にわたる多種多様な



図⑭: 日本郵趣協会がデザイン協力した切手、ハンガリー(上・70%)、ルーマニア(右・40%) / 古河パビリオンの富士通コンピュータFACOM270/30によるデザイン、リベリア(左・70%) / 三波春夫と農協マーク。



図⑮: 共同印刷製のグレナダ(右・70%)とトーゴ(下・65%)。



ダイ・プルーフなど



図16：フランス印刷局のダイ・プルーフ(上・出展国のモナコ)やデラックス・シート(右上・サンピエールミクロン)、カラー・トライアル(右・チャド)。[各45%]

大型切手の発行が多くあります。東欧諸国、南米諸国や、現在ではアラブ首長国連邦を構成する一部の首長国で、1960年代から1970年代にかけて収集家目的に切手を濫発したいわゆる「土侯国」では、浮世絵や仏像などといった日本のイメージに始まり、続いて具体的な万博会場や、パビリオンが描かれるようになります。いくつかの土侯国では、デザイン上現実には存在しない景観構成に共通要素もあり(図11)、日本で制作と思われる。さらに3次、4次と発行を続けた土侯国では、もはや図案に於いても惰性的なものとなっています。

ウムアルキワインでは当時の天皇皇后両陛下肖像を切手に描き、宮内庁から苦情を受けた事から一旦発行中止としたため、不発行切手などと称され一時は高価に取引されましたが、現在は日本の市場に多く安価で存在します(図12)。亡命政権と称するオーマン(図13)や、共和国から追放された王政派と称するイエメン王国の切手もあります。

デザイン面では東欧のハンガリー、ルーマニア、そしてアフリカのリベリアに日本郵趣協会が協力し



ています(図14)。印刷ではグレナダ、トーゴは共同印刷製(図15)で、他にもシートの形状から共同印刷製ではないかと思われるものがあります。

当時、これらの切手の中には日本やアメリカなどの切手商が切手発行権を買取って自国内で印刷したり、制作販売契約をかわした上で出資し、希望する切手の発行許可を得たりする事も行われています。

■万博切手の印刷・発行など

フランス関連諸国のフランス印刷局製切手にはダイ・プルーフやカラー・トライアル、デラックス・シート(図16)などもあります。ただし、チャドは1次のみがフランス印刷局の凹版印刷ですが、2次、3次と複数の担当官が個別に発注し、その後の加刷も含めて乱発気味となっています(図17)。また、ガボン(出展国)、オートボルタ、モーリタニア、ニジェールのグラビア印刷はパリのSOCIETE NOUVELLE IMPRIMERIE DELRIEUです(図18)。

中には金箔切手と称されるものがありますが、成

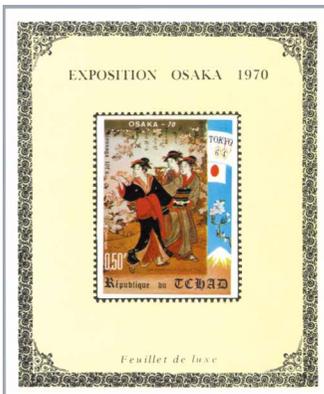


図17：チャドの乱発切手の1つ。[50%]



図18：パリのSOCIETE NOUVELLE IMPRIMERIE DELRIEUで印刷された切手。左からガボン、オートボルタ、モーリタニア、ニジェール。



金箔切手など



図19：純金を使用したガボンの金箔切手(左)は、金の国内輸入解禁後に販売された。マナマの切手(右)はシリコンとアルミが主成分。「各65%」



図20：ハイチ、閉幕2年後の発行で、加刷切手もある。



図21：偽国の1つ、ストロマ。既存のラベルに加刷をしたもの。

分分析をすると、金箔切手と言えるものは、金を主体として僅かにコバルトを含む純金切手ガボン(出展国)と、金とタンゲステンが半々のアフール・イサーのみで、他はシリコンとアルミが主成分でした(図19)。ちなみに当時は金の輸入制限があり、日本の切手商が発行当初に入手したガボンの金箔切手は、スイス銀行に預けられ、輸入解禁となった3年後にようやく日本国内で販売されました。

ハイチは日本万国博覧会閉幕から2年後の1972年10月27日に万博の切手を発行していますが、これは万国博に参加申請した後、参加を取り消した事情があるためと思われます(図20)。当時のハイチは北半球最悪と呼ばれた独裁体制を誕生させたデュヴァリエ大統領の時代でした。

■その他

国の体裁を全くなしておらず、国際的にも認められていない「偽国」の発行として、スコットランドの各島ダブル、サンダ、ストロマ、パベイ、そして、

インドのナガランドが見られますが、これらは全て既存のラベルに加刷したものです(図20)。

郵趣面で「土侯国」や、ましてや「偽国」などをコレクションに加えるのか、その良し悪しは各個人の判断に委ねるべきものですが、当時の社会状況も見られ、土侯国切手発行については少なからず日本国内の関係者があり、詳しく観察すると当時の郵趣界が見えつつある点に於いても無視できない面もあるかと思えます。

これら万博切手には、現代から見ると、発行国に無関係な題材の大型切手、多種乱発や金箔切手など、結果的には切手ビジネスとして、先見的な要素さえ見られます。また、肯定的な観点からは、日本国内からのデザイン参加により、海外からの日本のイメージに70年代当時の先入観が最低限に抑えられた事や、デザイン上のミスも抑えられたという点も考えられます。

■会場内に設けられた万国博郵便局

開催国日本では、万博会場内に設けられた郵便局

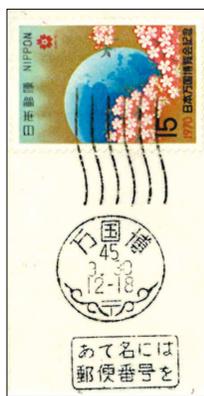


図22：分室名が記載された和文印と、番号(1：万国博本局、2：中央口分室、3：木曜広場分室、4：土曜広場分室、5：日本館分室)で区分された欧文印。欧文三日月印は4：土曜広場分室、欧文ローラー印は2：中央口分室。

万国博郵便局



図24：楕型印、欧文ハト印のバラエティ。楕型印局名小(左上)、楕型印局名大(右上)、欧文ハト印局名小(左下)、欧文ハト印局名大(右下)。*欧文ハト印のOSAKAは円弧状になっている



年賀楕型印
標語入り機械印

図23：万国博局の機械印や年賀印、消印もれ消印。



標語入り年賀機械印



消印もれ消印(大)



消印もれ消印(小)

万国博閉幕後のマテリアル



図26：スペインの「太陽の塔」を描く切手。

図25：ニカラグアの加刷切手(左・55%)。上はダホメイで、ベナンへと国名変更を加刷。

の消印について記します。万国博局(本局/昭和44年10月6日開局、45年9月30日閉局)の他に、中央口、木曜広場、土曜広場、日本館に分室(昭和45年3月14日開局、9月13日閉局)が設けられ、和文の櫛型印とローラー印、欧文の三日月印とローラー印が使用されました。和文印には分室名も記されていますが、欧文印では万国博局(本局)も含め1~5の番号を付けて区分されました(図22)。その他、万国博局(本局)では機械印、年賀印(櫛型印と機械印)、消印もれ消印なども使用されましたが、いずれも希少です(図23)。

櫛型印では局名に大小のバラエティがあり、和文ハト印も同様です。欧文印では三日月印のD欄の「OSAKA」が水平に対し、ハト印では円弧状となっており、局名にも大小バラエティがあります(図24)。

その他、万国博局では特印や小型印はもちろん、メータースタンプや料金後納、別納印なども使用されました。万国博閉幕後の昭和45年10月1日から46年3月31日までは、大阪中央郵便局万国博臨時出張所が設置されました。

万国博の閉幕後

チャド、ニカラグア、ダホメイでは、万博切手を流用し、札幌オリンピックやPHILATOKYO'81、国名変更などの加刷切手を、シンガポールではSHINGAPORE2015にデザインを流用した切手を

コラム 万国博電報電話局

あまり知られていませんが、万国博電報電話局も万博会場に隣接していました。下は開会式と閉会式の祝電に押されたその日付印です。万国博電報電話局は当時、電電公社の電報電話局として建設されたもので、現在はNTT西日本万国博ビルとなり、付近の回線を収容する電話局として稼働しています。



◀開会式(左)と閉会式(右)の祝電に押された万国博電報電話局の日付印。

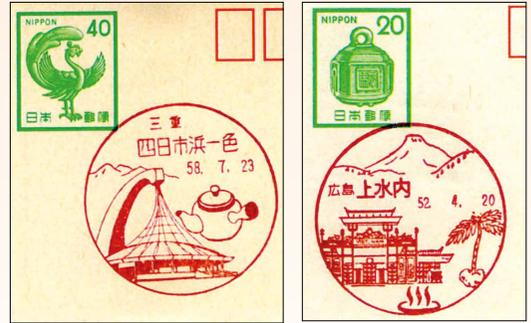


図27：風景印に見られたオーストラリア館(左・四日市浜一色局)と、ベトナム館(右・上水内局)。「各70%」

2013年に発行しています(図25)。

スペインは1989年のセビリア万博周知切手の1つに太陽の塔を採用しました(図26)。日本でも1996年(戦後50年メモリアルシリーズ第2集)、2000年(20世紀シリーズ第13集)、2015年(地方自治法施行60周年シリーズ・大阪)に太陽の塔が描かれた切手を発行しています。また、万博会期終了後に一部を除きパビリオンは解体されましたが、いくつかのパビリオンは各地に移設され、オーストラリア館は三重県四日市市、ベトナム館は広島県湯来町に移設されて風景印にも登場(図27)しましたが、その後、この2館も解体され、風景印も図案改正されました。

以上、万国切手では、当時の社会や郵事情を伺う事ができる他、バラエティ(図28)やエラーなどもあるため、専門的な収集に進める事もできます。また、当時盛んに収集された各パビリオンのスタンプやホストのサイン*1、メダル、ペンant*2、シールやワッペンなどを加えたオープン作品など、現在も意義のある収集対象とする事が可能です。

[協力] 犬飼英明氏、大林 進氏、堺 直人氏、椋山哲太郎氏



図28：万博切手に見られるバラエティ。左・オーストラリア20cのガッター左のシート10番切手に見られる「長足R」。右・香港25cの50番切手に見られる「H欠け」。

*1：万博当時はまた外国人がもの珍しく、来場者が各国のパビリオンホストにサインを求めた事が流行した。
*2：観光名所の土産物として、高度経済成長期には長三角旗のペンantが流行した。